

セツ つらひ

No.58



目次

ひと言	清岡 修	1
特集 教育実践とは何かを考えるために		2
—中学校3年生「バレーボール」の実践をめぐって— 実践の報告		
「生きづらさ」を「夢や希望」に	矢部 英寿	
「夢や希望」を「技術・ルール・制度」に	浅川 俊彦	10
矢部実践から学ぶ対話する体育生活の中身にまで切りこんでいっている	東田 晃	11
教室の報告		
よいしょ！まかしょ！月見小！	清水 仁	14
仲本正夫さん講演会報告		16
「新しい世界の発見」から「新しい自分の発見」へ		
—中里百合子の高校3年間の数学の学びをたどる—		
仲本正夫氏の実践に学ぶ	平居 淑子	18
仲本先生の講演をきいて	櫻井 大志	19
学習を通して生徒の人生まで変わる！	須藤 恭子	20
私と読書		
読書への目覚め	前谷津 剛	21
私が本を好きな理由	掛川 凜	22
ゲド戦記「自分を抱きしめる」	菊田めぐみ	23
センター日記		24

題字：江島隆二 表紙・講演写真：千葉建夫

ひと ひらがな

清岡 修 (専任所員)

本号は、テーマの一つに「私と読書」をおいたが、私には、読書以前に忘れられない経験がある。それは、ひらがなを知り、覚えたときの経験だ。退屈だった電車の時間が楽しい時間になった。母と一緒に電車に乗ると、すぐ靴を脱ぎ窓の方を向いて座った。一駅ごと、電車が駅に停まるたびに駅名(ひらがな)の表示を読み上げた。「いなげ」「しんけみがわ」「まくはり」「つだぬま」……。今までは、気にもとめず素通りしたそれらの駅名を読みあげること、自分の家の最寄り駅と目的地の駅名しかなかった私の世界に、その間を結ぶ新しい場所と世界が生まれた。今までと景色も世界も違ってみえた。そして、そんな自分もどこか違ってみえた。

もう4月だ。今年も、新1年生が入学してくる。学校は、子どもたちとどんな発見と喜びをつくり出すのだろう。

特集 教育実践とは何かを考えるために

— 中学校3年生「バレーボール」の実践をめぐって —

矢部英寿さんの実践を次に紹介します。長い報告原稿を通信のために短くしていただきました。報告の後に2人の会員に感想を書いていただきました。編集部としては、この特集の矢部さんの実践をもとに広く教育実践とは何か、教育という営みはどうあればよいのかを話し合いたいと考え、後日、話し合う会をもつことにします。その案内を後に記してありますので、ぜひご参加ください。

1 実践の報告

「生きづらさ」を「夢や希望」に

「夢や希望」を

「技術・ルール・制度」に

矢部 英寿

1. Aの苦しみ

3年A組のAは優しい心の女の子だ。友達を大事にして心配りを忘れない。小学校からバレーボールのスポ少で鍛えられ、仲間思いを見込まれて中学校3年生の夏にバレーボール部のキャプテンに推された。県内でも強いバレー部で、春高バレーで

活躍したOBもいる。仲間とそして顧問との間に入り率先して練習に励んだが思うように上達しない。チームも思うように勝てない。3年生になって新入部員が入る頃、Aは練習中に過呼吸を繰り返すようになった。満足に練習することができず、6月の中総体前に退部することとなった。

冬になると体育の授業でバレーボールが始まる。Aは授業ではあるけれど再びバレーボールと向き合わなければならなくなる。バレーボールの時間になるとAは体がこわばった。「保健室で休みます」といつて授業に出ない日もあった。教室でバレーボールの授業をしていた時は机で両のこぶしを握りしめて震えながら泣き始めた。クラスの仲間は彼女を囲んでなくさめた。

そんな彼女たちに私は、授業中「Aは苦しんでいる。みんなもよく知っていて支えているけど、寄り添ったり支えるだけではないのか」と問うた。バレーボールの授業は、自分たちの願いや思いは何で、その願いや思いをどうやって技術やルールに織り込んでいくかを追求する授業だ。Aの苦しさに共感するところがあるならばバレーボールの授業でこそ、その思いを表現し

ていかなければならないのではないかと、私はそう言いたかった。

2. 3年生のバレーボール技術学習

3年生での技術学習は、「ラリーにつながる技術編」「確実にスパイクを打つ技術編」「スパイクをさせない技術編」という3つの展開である。「ラリーにつながる技術編」でボールがこない場合の動き（カバリング）の確認を行い、「確実にスパイクを打つ技術編」で攻守切替の動きを学び、「スパイクをさせない技術編」でブロックとブロックはずしを学んだ。

技術的な学習を進める一方で、「どのようなバレーボールを目指すのか」という目標探しとそれに伴う「ルール作り」は毎時間のように話し合っていた。

さらに、毎時間のように作文を書き、作文はグループ内で交流し、グループノートは学級内で交流し、学級で学んだことは学年内で交流していた。

3. スパイクを打つことは「自己中」?

2月に入って間もない頃、B組から授業は展開し始めた。私立高校入試の翌日だった。3年B組の授業で、「B組はどんなバレーボールをしたいのか」と体育館の壁に貼った紙に私は書き、子どもたちの答えも壁の紙に書いていった。まず発言したのは「楽しいバレーにしたい」とB。続いてCが「ラリーの続くバレーがいい」。Dが「みんなが仲良くやるバレー」。Eが「いつぱい」とる。Fが「積極的なバレー」。「じゃあG、最後ね」といつて発言を促すと、Gは「スパイクがうまく決まるのがいい」と言った。私が壁に貼った紙にそう書いている途中、Gは「何か自己中?」と小さな声でつぶやいた。

1年生の時こそスパイク打ちたい、サーブ打ちたい、と直情的に主張していた彼らだが、2年生になった頃から、ラリーを楽しもうとしてきていた。実際、1年生の頃の特に運動能力の

高い生徒は、失敗しても強いフローターサーブに挑戦しスパイクも打ちたがった。何本も失敗し相手チームも味方チームも辟易する中で、やっと決まった一本を一人だけ喜んでいたりした。しかし、それではゲームが成立しない。直情的な発達段階を抜けた2年生では、確実に入る優しいサーブからゲームがスタートするようになっていた。

Gが「何か自己中?」とつぶやいた背景にはそのようなこれまでの学習の経緯がある。

私は壁の紙にGの言葉を書き、すぐに「自己中?」ってつぶやいたんだけど、G、何で?」と聞くと、Gは控えめに「決まったら続かないし」と答える。後からFが「自己中、自己中」とはやす。「これねえ、実は大事なところの話になってる」と私は言った。バレーボールのおもしろさの中核は、得点につながるスパイクなのか、それともゲームの過程であるラリーなのか、実は子どもたちは1年生からこの問題に揺れ動いてきたものだ。「何か自己中」発言は捨て置くわけにはいかない。しかし、体育館の中は2月の初めで氷点下。体育館ではこれ以上議論ができない。「これねえ、実は大事なところの話になってる。今度あたたいところできつくり話そう」そう言って一旦議論を留保した。

4. 「何か自己中」発言を受けとめて

2月19日、授業の始めにHの作文を紹介した。(Hはまだ進路が決まっていない。友達の何人かが推薦で高校が決まって行くなか、内心あせりがある。)

3年生になって、とってもいいクラスに恵まれてここまで私たちがB組は成長しました。なぜか(?) B組は優秀で3分の1ぐらいの人がもう推薦なりなんなりで進路が決定しています。また、私を含め一般人試を控えている仲間もいます。

一般入試に向けて、必死に頑張っていると当たり前だけど、スト

レスや疲れがたまってしまう。ましてやクラスがひとつになつて取り組む行事もなくなり、クラス全体としての雰囲気、みんなの疲れが少しずつが悪化(?)してきているのでは?と最近私は思い始めました。そんな中、体育の授業でみんながバレーのことを学び合い、そしてアドバイスあつて……。クラスみんな体育のバレーの時はとても楽しそうでした。(いつも楽しいが特に!)クラスでバレーボールのおもしろさ、もっとこうしたい方がいいんじゃない?といった意見交換をするとき、みんな「ラリーが続くのが楽しい」と答えた。しかし、Gは違った。「おれはスパイク……」と言ったあとに、「もしかして自己中?」と言った時、バレーボールってこんなに深いんだと心の中で思っていました。

確かにゲームのとき、スパイク打つと、「しける〜」という声も上がります。しかし、「よっしゃ〜」と喜ぶ班もあります。私はラリーが続くのがおもしろいけど、気持ちよくアタックを決めたいというGの気持ちもわかる。バレーボールをよく言えば、ラリーとアタックといった2つの方法で楽しむことができると言えます。しかし、逆に、ちょっと悪く言えばどちらが本当のバレーボールかという疑問も出てくるでしょう。こういうようにバレーボールのことをいろいろ考えてくるといろんなことが学べました。このバレーボールを通して私が学んだ事は、

- 1 バレーボールの技術。ただの技術ではなく、バレーボールが楽しくなるような技術。
- 2 バレーボールを通じて仲間の本当の姿を改めて確認できたこと。例えば、人に何かを教えるようなことはしなないと思つてたヤツが実はとつとも思いやりのあるヤツだったとか……。
- 3 私たちのクラスはやっぱり最高だと確認できたこと。
- 4 バレーボールを通じて声をかけあう大切さを知つたこと。……です。もっとたくさんあるけれど、1〜4が主です。

Hは「どちらが本当のバレーボールかという疑問も出てくる」と書いている。ラリーなのかアタックなのか。歴史的にみればラリーから始まっている。しかし、勝負がかかつてきて、スパイクが登場する。それからは、スパイクの技術とラリーの技術がせめぎ合い、スパイクの技術が優勢になりすぎると、ラリーが続くようなルールに改正されていく。歴史的にもそうだし、

体育の技術指導研究でも、スパイク中心の系統でいくのかラリー中心の系統でいくのか議論が分かれる。私はラリー中心の系統だと考えて授業をしてきたが、そこではいつもスパイクを決めたいという声の一部ではあるが生徒からあがり、その声にどう対応しようかと考えてきた。

私は、直接「どちらが本当のバレーボールか」ということに触れずに、次のように言つた。

「みんな、楽しいバレーっていうけど、雰囲気だけでは楽しくならないんだな。雰囲気だけで仲良くならない。3年間そうだったでしょ。じゃあ、どうするの?何かを変えようとしなけりゃならない。何を変えるの?ひとつは、うまくなること。Hが学んだと言つた技術。Hはただの技術じゃないって言つた。すごいことに気づいていると思うよ。もうひとつはルール。どっちも3年間の体育でやつてきたでしょ。今日の、グループ練習、今日もうまくなるよ。バレーボールが楽しくなるような技術つてのがただの技術じゃないんですよ。」

5. 「きれいなラリー」の発見

自分たちが目指すバレーボールはラリーなのかスパイクなのかという議論は、多かれ少なかれどのクラスにもある。先にも述べたように、3年生のこの頃の時期になってほしいラリー優勢の議論になっている。2月20日、3年A組のIの文を、A組の授業で紹介した。

僕らのバレーボールは高校で通用するためにやっているわけではなくて、みんなが卒業してバレーをやるわけじゃない。だから、厳しくやって強くなる必要はない。でも、ある程度の技術を身につけて少しでも長いきれいなラリーを続けたい。授業のバレーはそれが最終目標なんだと思う。みんながだらだらやつてもバレーはつまらないし、ギスギスして厳しくやつてもつまないけど、ある程度のことできて、それで楽しくやれば笑顔がある。笑顔がで

きて、ラリーが続けばみんなはとても良いバレーをしているんだと思う。だから、少しずつレベルアップしてまずは楽しいラリーをある程度強くなればスパイクを打つてきても持ち直せる。それでまたラリーも続き白熱する。みんながそんなバレーができたなら笑って卒業できると思うし受験にだって勝てる気がしてくる。

この、Iの「きれいなラリー」という言葉にひつかかった。Iはどんなイメージでこの言葉を使ったのだろう。みんなはどう思うのだろう。それで、授業でこの「きれいなラリー」について考えることにした。場所は教室。

「長いラリーはわかる。楽しいラリーもなんとなくわかる。きれいなラリーってどういうことだと思う？」と私は問いかけた。「練習したパターンがうまくできたラリー」「カバーをたくさんして続くラリー」という答。

「じゃあ、逆にきたないラリーってどういうラリー」と聞いてみると、「一発で返すラリー」とか「一定の人しかさわらないラリー」という答。

「つまり、みんなが関わって、しかもそれが練習したパターンでラリーが続く。練習したパターンというのは、つないでつないでカバーもして、そしてゆるくてもいいからスパイクで返すラリーってこと？」「Iは、このきれいなラリーが最終目標だと言ってる。」

「みんなもそんなラリーがいいって思うの？」
「うん。うん。」

「そうかラリーにきれいなラリーときたないラリーがあるっていうのは大発見。」

確かに、この「きれいなラリー」というのは大発見だった。ここからは他クラスでも「きれいなラリー」の追究が始まることになる。(あるクラスで紹介した作文は他のクラスでも紹介していたし、あるクラスで問題となったことは他のクラスでも議論していた。だいたい、体育館の壁はいろいろなクラスの作文

やグループノートを拡大したものが貼りっぱなしになっていた。ラリーかスパイクかという議論は、バレーボールの歴史の中でも問題にされてきたことであるが、これはどちらに重点を置くのかという議論ではなく、ラリーそのものの質を追究しようとする発想だ。Iの作文中にある「ある程度強くなればスパイクを打つてきても持ち直せる。それでまたラリーも続き白熱する」という言葉からもわかるように、スパイクはラリーの質を高め、ラリーがスパイクの技術を高めるという関係にあるのだ。そうであるならば、「きれいなラリー」の追究の中ではGの心配した「自己中なスパイク」はありえないことになる。私はワクワクしながらこの「きれいなラリー」という概念をB組の授業に持ちこむことにした。

6. 「ラリー」か「スパイク」か

2月20日、再び3年B組の授業。まず、Jの作文を紹介した。

私はバレーボールのおもしろさで、「ラリー」も「スパイク」もどっちもおもしろいと思う。しかし、「ラリー」は続いているうちはいいが、続きすぎるから、どこかで決めて点をとらないといけないと思うし、「スパイク」はあげてもらったトスをバシッと決めるのは快感かもしれないが、それでずつと点をとっていると同じ人しかスパイクを打てなくなってしまうし、勢いをつけたスパイクはミスしやすいと思う。スパイクを決めることは自己中じゃないかもしれないが、ゲーム中は自己中に感じるかもしれない。バレーボールはラリーとスパイクをうまく組み合わせるといい試合ができると思う。

他の授業中は勉強勉強で皆ぐったりしているが、体育になると皆楽しそうにやっている。勉強もバレーボールほど楽しいものだったらしいと思う。バレーボールを学ぶことは、チームで協力することが何より大切だ。という意味があるんだと思う。前に試合して私が届かなかったボールを後でカバーしてくれたことがあった。やっぱりバレーボールは作戦を立てたり相談したり声をかけあうことが大切だと思う。

「Jは、スパイクですっと点をとっていると同じ人しかスパイクを打てなくなる、と言っているけど本当にそうなの」と私は聞いた。

「どうしてもトスをうまい人へ上げようとするからそうなる。」

「うまい人が続けて点を取つてるとローテーションが回らなくなるから、結局ずつと打つてることになる。」

「試合をするからには勝ちたいと思うから自然と打てる人にトスが上がるようになる。」

「勝ちたいとは思つてるけど、どうもすつきりしない気持ちが残るつてことだ。Jも自己中じゃないかもしれないけど、ゲーム中は自己中に感じるかもしれないつて言つてるし、Gだつてスパイクピシッがいいつて言いながら、だから『おれつて自己中?』つてつぶやいたんだよね。」「じゃあ、納得できるスパイクのあるラリーつてどういうのよ。」

「A組のIの作文に、そのヒントになる『きれいなラリー』つていうのがあつた。B組の考えるきれいなラリーときたないラリーつていうのはどういうのよ。」

ここからB組でもラリーの質の議論が行われた。

★きれいなラリー

- ・ つなごうという意識のあるラリー
- ・ スパイクを打つ人の名前を言つてバコーンつていうラリー
- ・ みんなが楽しめるラリー
- ・ スパイクを決めた人をチーム皆で祝福できるラリー

★きたないラリー

- ・ 個人プレーのラリー
- ・ やる気のないラリー
- ・ リズムの悪いラリー
- ・ 少しの人数でやるラリー
- ・ みんなが楽しめないラリー

「グループみんなが楽しめる、Kが言つたようにスパイク決めてもみんなで作つたスパイクなら、皆で喜べる。これは、直接ボ-

ルにさわらなくても、カバリングに走つていた人も含めて皆で作つたスパイクつてことだ。少しの人数でやつたスパイクはグループみんなで喜べないつてことか。」

授業後の感想に、

L ボールにさわるのは必ず1人だけ。その影ではみんながカバールがある、こんなバレーボールをしたい。また、きれいなスパイクが決まつた時には打つた人、打つてない人、敵、味方関係なく楽しめるバレーボールがいいと思いました。

K バレーボールはやっぱりチーム全員でやるスポーツだと思う。きれいなラリーではボールに触れなかつた人もよいラリーだと思える。また、アタックが決まれば全員で喜び合える。また、点をとられても悔しいと言うよりすごいと感心してしまうくらいバレーになつてくる。

M ボールに関わろうとする意識を持つことでよりラリーが続いたり誰かにスパイクを打たせようと思う気がする。相手も含めてボールに関わろうとすれば、ブロックで返されたりスパイクを決められてもすがすがしいとかスカツとして気持ちの良いバレーにすることができると。

N 同じラリーでも、スパイクでも、決まつてうれしいスパイク、うれしくないスパイクがあつて、バレーボールはとも奥の深いスポーツだと思つた。チームのみんなが喜んだり楽しんだりするために、ひとりだけでやるのではなく、チームのみんなが助け合つたりするのが大切なんだと思つた。

J 『納得できるスパイクのあるラリー』とは何かで、きたないラリーを続けるのではなく、きれいなラリーを続けることだということがわかつた。

D 今日、スパイクについていろいろ考えてみてスパイクつてほんと深いなあと思ひました。みんながひとつのスパイクを作つていけば自己中なスパイクじゃなくて良いスパイクになると思ひました。

(「みんなで作るひとつのスパイク」か、これもまたすごいことと言つな)と私は感心してしまふ。「そんなスパイクなら自己中なスパイクじゃなくて良いスパイクになる」というのもすごいと思ふ。

Eは「深くと思いました。B組なら、みんなでやって喜んで喜べる幸せなバレーができると思います。」と書いた。

B組なら……できる。そういう理想を実現させるところまで来ているということだ。

こうして「きれいなラリー」を考えることで、Gの「何か自己中？」発言に決着をつけたのである。

7. 「受験にも勝てる」発言の波紋

A組で「きれいなラリー」という言葉を生んだIの作文の後半に「受験にだって勝てる」という文があった。実は私にとつても見逃せない一言だった。「きれいなラリー」に関する議論が一段落した後、同じ時間で私は次のように問いかけた。「それで、Iはきれいなラリーのバレーができたなら、笑って卒業できると思っし受験にだって勝てる気がするということだけど、どうして受験にだって勝てる気がしてくるの？」

「気持ちの前向きになる」とか「クラスの雰囲気がよくなる」とかに続いて、Oは「ひとりでがんばつてると思わなくていいってことだと思えます」という。「そうか、これか？」と言いながら、黒板の上に「みんなで自分の目標を達成させる」と貼つてあるクラスの目標として決めたであろう掲示物を指さした。

授業後

P 今日、みんなが言っていたことを聞くとやる気が出た。いい雰囲気
気で受験して卒業したい。

Q 自分なりに考えていた答と、みんなが出した答が結構一致した。
なるほどと思う意見もあったし、みんなも同じ気持ちなのかなと思
いました。そうやって考えると本当に受験に勝てそうな気もしてき
ます。

授業後の作文には「受験に勝てる」みたいなことになってしま
ったが、それはそれで問題だ。この時点で「受験に勝つ」じゃな

くて、「受験という制度に勝っている」のだと私は思う。ただか、能力のある一面で輪切りにされ、そこに優劣がつけられるような差別化、分断化する制度に対して勝っていると思うのだ。そこまでの自覚にはあと一歩必要か。Oは授業後「バレーボールを今までやってきて、バレーにはいろんな意味があるんだと知ることができました。自分の意見だけでなく、他の人の意見も聞くことでまた、新たな考え方ができた。バレーを通してみんなががんばれるといいなと思っ」と書いた。

授業後のメモに私は次のように書いた。

「北方教育の先人たちの課題を受け取り、乗り越えなければなら
ない。子どもたちの現実に対する教師の無力感とたたかった先人。
子どもの現実をリアルに見つめ、貧乏綴り方と揶揄されながらも、
でも、愚直に現実をリアルに見つめさせ、生きる希望と力を得さ
せた。でも、壁はあった。教えるべき内容の不明確さだ。カリキ
ュラム作りが課題として残った。情緒的ではダメだというのはそ
のためだ。皆で受験とたたかうでは情緒的すぎる。バレーボール
のおもしろさに込める願いは何で、それをラリーという技術に、
そしてルールに、そして大会という制度にどう織り込んでいくの
か、願いを情緒で終わらせずに形にしていく方法を教えたいの
だ。」

8. スパイクをさせない技術編

2月も後半に入り、技術学習は「スパイクをさせない技術編」
の段階へと進んだ。Rの作文を読み合うところから始めた。

バレーを楽しむするには、ラリーを続けることもあると思うし、
スパイクやアタックを決め相手の波をくずして楽しくする方法もあ
ると思います。ラリーを続けていきなりスパイクを決めると点も入
るかもしれないし、相手もスパイクなどいつ来るかわからなくなり、
やる気が出ていい勝負になると思います。バスケでも、同じだと思
います。速いパスをして相手のディフェンスをくずしそこからシュ

ート！それからシュートを打つふりをして、ディフェンスをぬく。だからディフェンスも気が抜けないし、オフフェンスのほうも同じパターンではなくいろいろな方法で点を取りにいかなければならない。バスケでもバレーでも、いろんなスポーツでも、相手をくずして点をとる。でも、頭を使いいろいろな方法でゲームを楽しくする。点をとるだけではなく、そのスポーツを楽しめればいいと思うしどうすればゲームが楽しくなるかなどいろいろ考えが必要だと思います。

拡大コピーで大きくしたものを張り出し、皆でこれを読んだ。ブロックが始めているのだが、ブロックをかわしてスパイクをするのもバレーボールのゲームの楽しさだとRの作文は教えてくれる。そんなことを話しながら、ブロックをかわす方法はどんな方法があるのかと聞いた。テレビを見ているのならば、速攻があるという話になるだろうと予想していたが、意外にも速攻という意見はなく、前衛ネット際の2人が何回かパスを回しブロックが外れたと思ったときにスパイクをすればいいというアイディアが出た。Rのバスケットのディフェンスはずしがヒントになったのかもしれない。では、練習してみようということをやってみると案外これがいける。3回で返さなくてもよいというルールになつていたのだが、ここでも生かされた。

実際、よく考えてみると、ブロックのかわし方は時間差と空間差の組み合わせだ。ライト攻撃と見せかけてレフト攻撃にするのは空間差による攻撃。オープン攻撃と思わせて速攻というのは時間差攻撃。レフトアタッカーがセンターからの速攻に入ると見せかけてセンターがレフトに回ってオープン攻撃というのは時間差と空間差を組み合わせた攻撃ということになる。子どもたちが考えたのは、空間差を利用してブロックをかわすというものである。しかもオーバertimeを反則にしないルールにしているから、レフトとライトにボールを回しているうち、最適な時にスパイクを打てばよいという発想になったのだろう。

9. 5クラス対抗の学年バレーボール大会

5クラス対抗の学年バレーボール大会を行った。2月25日、水曜日。体育館に6面コート。1クラス6チームで、これは授業の時のチーム、つまり学級の生活グループそのままである。例えば、あるクラスの1班は①コートで他のクラスの1班と対戦する。学級総当たりで1チームあたり4ゲーム行うのである。何日かかけて、実行委員を組織し、学級毎のルールを学年ルールに調整していった。さらに開会式や閉会式で実行委員が何を話すかまで実行委員同士が相談しながら準備していった。

実行委員が練つて考えたこの大会のルールは次の通り。このルールが各学級のルールを持ち寄つてまとめ上げたものだ。

- ① 体育の授業で行っているチームで行います。欠席者がいるチームはそのまま行けることはできません。
- ② 審判はパイプいすに座っている人です。得点もめくつてください。
- ③ 11点ゲームです。ジュースはありません。
- ④ ダブルコンタクトは反則にしません。1人続けて2回さわってもいいです。3回はだめです。ラリーが続くやすいようにするため。
- ⑤ タッチネットは反則にします。
- ⑥ 何回で相手に返すかは、制限なしです。
- ⑦ サープは、バレー部だった人は、強烈な

中学校学習指導要領体育分野「球技」内容

- ① 学年及び2学年
 - (1) 次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームを展開できるようにする。
 - (2) アゴール型では、ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防を展開すること。
 - (3) ネット型では、ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防を展開すること。
 - (4) ウェースボール型では、基本的なバット操作と走塁での攻撃、ボール操作と定位置での守備などによって攻防を展開すること。
 - (5) 球技に積極的に取り組むとともに、フェアなプレイを守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすること、作戦などについての話合いに参加しようとするなどや、健康・安全に気を配ることができるようになる。
 - (6) 球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。
- ② 次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、作戦に応じた技能で仲間と連携しゲームを展開できるようにする。
- (3) アゴール型では、安定したボール操作と空間を作りだすなどの動きによってゴール前への、侵入などから攻防を展開すること。
- (4) ネット型では、役割に応じたボール操作や安定した用具の操作と連携した動きによって空いた場所をめぐる攻防を展開すること。
- (5) ウェースボール型では、安定したバット操作と走塁での攻撃、ボール操作、連携した守備などによって攻防を展開すること。
- (6) 球技に積極的に取り組むとともに、フェアなプレイを守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすること、作戦などについての話合いに参加しようとするなどや、健康・安全に気を配ることができるようになる。
- (7) 技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解し、自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。

サーブはしないでください。

⑧ ローターションをしてください。

⑨ ゲームの順番になったら、体育でいつも使っている班のコートに入ってください。例えば、1組の1班なら、他のクラスの1班とゲームをします。

⑩ 待っているクラスは、体育館のはじによって、座って応援してください。

⑪ 1階や特別教室の方へは行かないでください。

⑫ 安全に気を付けて行ってください。

10. 私たちは何と戦っているのか

「受験にも勝てる」発言の波紋はその後も広がりを見せていた。Iの作文「受験にだって勝てるような気がする」に対して、Oは「ひとりで頑張ってると思わなくていいってことだと思えます」と語った。Sはそのようなやりとりに対して「バレーができたら受験にだって勝てると思わない。けど、みんな一緒に戦っているということなのかもしれない」と書いてきた。私は「何と戦っているのか？受験と戦っているのではないでしょ」と言うとA組の子どもたちは「不安」とか「プレッシャー」と答えた。このやりとりに対してQは次のように書いた。

戦っているのは、授業で言ったとおり、プレッシャーとか不安とか、全て受験にたいするものだと思います。けれど、私は受験という出来事そのものよりも、その雰囲気と戦っているような気がします。周囲から様々なことを言われてイライラしたり、他の友達が先に受かって焦りを感じたり……。そんな嫌な雰囲気をクラスで出さないためにみんなで戦っているのではないかと思います。みんなバレーを楽しむことができれば、それこそクラスの雰囲気が良くなって、1人で戦っているわけではないと思えるようになるのかなと思います。

一方で、やっぱり戦っているなと感じるのはTの文。

何と戦うか、親の期待、自分の将来、勉強と戦っていると思う。2つ目が一番大きいと思う。高校に入らなくても良い仕事ができるならみんな苦労して受験なんかしない。しかし、高校に入ったからと言って将来が必ず切り開けるとは思わない。結局のところ何と戦うのか僕にはわからない。

やっぱり、受験と戦っているのではなくて、受験という制度、Qの言う雰囲気と戦っているのではないかと思える。Uはバレーボールの授業の最後にQの作文に対して次のように答えた。

私は、バレーを通して何と戦っていたのかよく分かんないです。でも、頑張ろうって思えたのはクラスの皆のおかげだと思います。バレーを楽しくやるだけじゃ受験に勝てるのは無理があるかもしれない。バレーがうまくいったから受験がうまくいくのも無理がある。でも、バレーの影響は大きかった。このクラスの雰囲気を継続させていけたらやっぱり受験に勝てる気もしてくる。

バレーをしながら、楽しいと思えたことが私にとって勇気とやる気につながったのも事実です。そのことがひとりだと思えないきっかけとなった。みんながついてると思える理由になった。こういうことを考えさせられる時間を作ってもらってあらためて感じさせられたのはみんながいてくれてよかったことです。バレーのことからちよつと離れてしまってもしょうないけど、ほんとによかった。

Uにとつて、身近なクラスの仲間のことを「みんながいてくれてよかった」と言えることはほんとうによかった。というの、Uは2年生の時に事情があつてよく学校を休んでいた。身近な仲間ではなく、「別の世界」へ行っていたのだ。中学生にとつて「別の世界」から再び戻ることは容易なことではない。「別の世界」の決別こそが彼女にとつての戦いであり、そこにみんながいたからこそ戻つてこれたのだと思う。

いじめる側といじめられる側の決着という戦いもあった。Vは小学校の時から続くいじめに、中学2年生の時には「死にたい」とまでもらすようになっていた。日頃作文といつても書くことになかったVは最後の頃次のように書いた。

みんなもそうですが、1班のみんなはとつても楽しくとつてもおもしろかったです。でも、今の班だからこそバレーが上手になったので、1班のみんなには本当に感謝しています。だから、バレーの時はまたたのしい1班とできると思いながらバレーをやつてました。

バレーボールの最後の授業では、クラスの皆に今思っていることを1人ずつ話すという授業だ。私はVに、2年生の頃思っていた気持ちと、今の気持ちをしゃべつても大丈夫と伝えていた。Vは短いことばではあつたけれども、その気持ちをしゃべることができた。Vの言葉を受けながら、Eは最後に次のように書いた。

本当にまじでガチで最高でした。バレーが待ち遠しくなつてバレーがかなり楽しくなつて、クラスが大好きになつて班が大好きになりました。あまり話さないような消極的な人（Vとは別の生徒：注矢部）が自ら話しかけたり、ボールを追つたり、輪に入つてくれたとき、ものすごくうれしくなりました。本当はものすごくいい人なんだと気づくこともありました。1班になるまで、このメンパーへの印象はいいものではありませんでした。（ぶっちゃけ）だけど、本当に本当にいい人ばかり。Vが去年『もう死にたい』なんて言つてたことに本気で悲しくなりました。Vも、Wも、CもKもMもこれからの人々に笑顔とか、幸せとか与えられるような人になると思います。

そして、冒頭のAは最後に次のように書いた。

私はバレーを通して、昔のバレーをしていた頃の自分と戦つていたと思う。私はバレーが好きでバレー部に入ったのに、いろいろあつて、それから辞めてずつとバレーをすると具合が悪くなつたりして、でも、そんな自分が嫌でした。そんな時に3年生でバレーを授業でできるようになつて最初はまた具合が悪くなつたりしました。でも、先生が「バレーの見方を変えろ」と言いました。体育のバレー

1は部活のバレーとかぶつてイヤだったけど、その言葉で私の何が変わりました。いつまでも、昔のことを思い出していたら前に進めないし、最後のバレーの授業も楽しくなくなると思いました。それから、バレーというスポーツの見方を変えてだんだんやつていくうちに楽しくなつてきて、バレーをやつても具合悪くならないようになりました。前みたいにバレーボールというスポーツを心の底から好きになりました。最後の体育の授業が終わつて、もう昔みたいにほならない、部活をしていたころの自分に勝つたな！と思えました。また、バレーを好きになれて良かったです。

11. 子どもたちがつかみとつたもの

この実践を通して、攻撃とラリーの矛盾について考えさせられた。私も考えたし、子どもたちも学習の中で考えた。攻撃とラリーの矛盾については、協同的な攻撃が、協同的なラリーを高め、協同的なラリーがさらに協同的な攻撃を高める関係にあるのではないかという点に気がついた。このことについて、子どもたちは「きれいなラリーの創造」という言葉で決着させた。「自己中ではない、暴力的ではない、みんなで作つたスパイク」と「みんなで考えたフォーメーションでカバーし合い、相手チームも含めてつなぎ合つたラリー」を「きれいなラリー」と表現し、それこそがバレーボールの本質であることをつかみ取つたのである。また、「きれいなラリー」はこれからのバレーボールという運動文化の発展の方向性を子どもたちなりに示したということもできるだろう。

一方、生活の問題も大きい。自分たちのクラスは最高だと子どもたちは言うようになった。バレーボールを創りあげることによつて、自分たちの理想を形にすることができたのではないか。自分たちの目標とする生活を一時でも実現させることができた。それは、「生活をよりよくする方法」を学んだと言える。自分たちが何かと戦つているという自覚に達し、それは漠然とであるけれども、制度としての受験であつたり、いじめであつ

たり、勝利至上のバレーボールと戦っているというところが見えてくる。それと対置できる自分たちの理想をクラスに作つたと

いえるのではないだろうか。

(学校体育研究同志会宮城支部)

2 報告を読んで

矢部実践から学ぶ

対話する体育

浅川 俊彦

矢部さんは子どもたちの「よりよく生きたい」という願いに寄り添い、それを願いのまま潰えさせないために「生活をよりよくする方法」として学ばせたいと考えた。授業の中で仲間の持つ「生きづらさ」を共有し、それを連れもて「夢や希望」に転換していく営みをくぐり抜けさせること。さらに技術やルールといった「仕組み」に反映させることを通して、『自分たちの生を取りまく世界は仲間と共に組み替えていくことができるのだ』という力強いメッセージを卒業していく生徒たちに贈ったのだ。

これまでも「できない」子によりよい、子どもたちの集団の力で「できる」ための技能の成り立ちを明らかにし、見通しと励ましの中で「できる」ようになっていった実践には多くを学んできた。また、いまあるスポーツのルールに疑問を投げかけ、討論と実践を繰り返す中で自分たちの身の丈にあうかたちにつくり替え、より豊かなスポーツ時空間を創造していった報告にもたくさん触れてきた。しかし、これほどまでに「個」と「集団」、そして運動文化の持つ「仕組み・様式」をきり結んだ実践記録にはそうそう出逢えるものではない。私はあわてて佐々木賢太郎さんの『体育の子』と『子どもたちの全面発達と体育』をとりだした。「人の子の師であるならばからだの技師、魂の技師、人権の技師でなければならぬ」と語つた佐々木は、子どもに「感じ方、考え方、生き方を教育し、それらを科学的認識にまで高める」こと、その認識に伴う豊かな感情が育まれなければならないことを強調している。まさに矢部実践はバレーボールという運動文化の技術・ルールを問い直し深めていくことを通して、豊かに感情を耕し生き方を問うていくという意味で、佐々木の課題意識に応える21世紀の生活体育といえるのではないだろうか。

子どもたちの「生きづらさ」はバレーに傷ついたAさんに限らず、競争的序列の中に否応なく組み込まれバラバラになりそうな一人ひとり皆のものである。それを象徴するのが中一で周りを辟易させたフロッターサーブなのだろう。いわば排他的技術である。それを乗り越え中二でラリーをつなぐことを志向し、協同的技術を身につけてきた子どもたちが今度は「スパイクは『自己中』なのか」という問いに直面し、現代スポーツの持つ（そしておそらく現代社会そのものが抱える）「競争と協同との矛盾」と向き合うことになっていく。そこに彼らは「きれいなラリー」というまさに弁証法的な関係を見いだしていく。

「きれいなラリー」が発見され共有されていく過程では丁寧な対話が紡がれていく。そしてこの対話が成立するのは子どもたちと同じ地平にたつてものを観ているからである。矢部さんは多くを語っていないが、誰もがラリーをつないでいくための技能（基本的なパス技能やカバリング）を身につけ、みんながスパイクを確実に打てるようにしていくのはそう簡単なことではない。技能・戦術といった運動文化の中核である技術と自分とのあいだにあるギャップを埋めるために、一人ひとりが徹底して自分からだと、そしてバレーの技術と対話をしていくはずである。それを保障する集団が育まれ、「わかる」「できる」ことがより高い次元で保障されていくことと「どんなバ

レーをを目指すのか」の深まりは不可分一体の関係である。そのレベルの高さに私は息をのみ、中高で体育を担当する身として嫉妬に似た感情を禁じ得ない。

(東京大学教育学部附属中等教育学校)

生活の中身にまで 切り込んでいつている

東田 晃

バレーボールにはあまりいい思い出がありません。高校の授業のときには、レシーブもサーブもトスもまったくうまくできませんでした。休み時間に友達と円陣バレーをすることがよくあって、やめればいいのに仲間の関係から自分もよく入っていたのですが、いつも緊張してドキドキしていた覚えがあります。大学でも本当は単位をとったほうがよかったです。ちよつと「避けて」とりませんでした。そんなバレーというゲームがちよつと面白いな、と思ったのは就職してから保護者のママさんバレーのお母さんたちに指導してもらって、それなりに技術が身につけてからでした(今も決して上手ではありませんが……。バレーボールには、「落としたくない・ミスしたらいけない」という不安がまずあると思うのです。だから私も小学生の子どもたち

とやるソフトバレーの授業では、「ワンバウンドあり」とか、ルールをまず設定して「安心して」参加できることから始めています。

矢部さんの実践を読んで、中学生でもレベルはちがうけれど、バレーボールそのものに対する葛藤が子どもたちの中にあることを感じました。どうそこを克服していくのかというのが授業の課題になるのだと思うのですが、一方で中学生の抱える悩みはやはりけっこう深刻だなあとということも読んでいて感じました。部活の中で深く傷つきなやんだAさんが、どう変っていくのか。

その葛藤や悩みを乗り越えていく過程が、イマドキの中学生の中にもこんな受け止めができた、考えられたり、対話ができたりするのだという、なにか郷愁にも近いような、とてもいいなあと感じるやりとりやわらかさを感じました(文章でのやりとりが主として載っているからかもしれませんが……。もしかしたら授業でのやりとりはもっと厳しいものもあるのかもしれないとは思いますが)。こんなふうに真剣に内容を捉えられて、話し合える子どもたちっていいなあと感じました。

体育館に貼りつ放しの感想文を読み(そこもいいなあと思うのですが)、そこから自分の考えにつなげられるっていいな、とか、「何か自己中?」「きれいなラリー」といった「ことば」を手がかりにバレーボールというゲームの本質に迫っていく、とか、実はその中で自分たちの生きてる生活の中身にも切り込んでいつているというところ

がこの実践の面白さなのだと思えます。バレーボール大会のルールづくりの中に確かにそれは生きていると感じますし、学習を進める中でルールの矛盾や疑問を乗り越えながら、バレーボールの文化の質を高めていつているのだと思います。子どもたちを育てたり鍛えたり高めていくのは、要求する文化の質との関わり、教材とか教科内容とかいうことになるのでしようが、そのことを改めて感じました。

しかし、ここまで書いてきて、ちよつと腑に落ちないというか、なんとなくわからないうところがあります。「きれいなラリー」の発見と討議はとてもおもしろいと思うのだけれど、「受験に勝つ」、そして「最高のクラス」というあたりが、なにか「きれいすぎる」気がしてしまうのです。果たして、バレーボールの授業の中だけで、この子たちの変化は生まれているのか。その変化は本物なのか? もちろんクラスのうちのさまざまなことがこの実践の中に立ちあらわれているのだと思いますが、中学3年生ってこんなに素直に「最高のクラス」って言えたりするのかなあと思うのです。どうなんでしょう?

(和光学園)

実践検討会案内

「教育実践とは何か」を考える

・日時 2010年5月15日(土) 13時半～16時半

・場所 フォレスト会議室(4F)

・会の内容(予定)

1. 実践報告

「生きづらさ」を「夢や希望」に

「夢や希望」を「技術・ルール・制度」に

報告者 矢部英寿さん(多賀城・高崎中)

2. 報告をもとに

①パネラーの発言

②参加者全体での討論